
生命の果てに

江角 稚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生命の果てに

【Nコード】

N0585Y

【作者名】

江角 稚

【あらすじ】

主人公が入院した病院で、運命的な出会いを果たすお話。…ざっくり言えばこんな感じ。

登場人物（予定）

リーシャ 脳腫瘍で入院した少年。

エレーナ リーシャと同室の少女。生れつき心臓を患う。

医師 主治医。

ローザ 看護師。

その他エレナの友達がちよこつと出て来る可能性あり。

夏休みと同時に（前書き）

突然ですが、ラブコメ（？）です。

きつと秋だからですね。

うん、きつとそうだ。

夏休みと同時に

もうこれ以上、私に悲劇を見せないで：

僕は今まで普通の生活をして来た。この十七年間で色んなことを見て、沢山の人に出会って――。

僕は全てを知った気でいたんだ。僕の全てを失うまでは。そして、君に出会うまでは。

僕は突然頭痛で倒れた。

夏休みの始まりと同時に、である。

病院で検査をしたら脳腫瘍が見つかった。

僕は緊急入院となった。

何故だ。

僕はこれからもっと勉強をして働きたいのに。愛してくれる家族や友人がいるのに。

何故だ。一体僕が何をしたと言うのだ？

リーシャは心の中で叫んだ。

辛かった。苦しかった。

そして何より、怒りと哀しみが込み上げてくるのを抑えきれなかった。

ああ、きっと僕は世界で一番不幸な人間なんだろうな…その時僕はその事実を疑わなかった。

だが僕はすぐに、それが間違いだと実感する。

僕は病室に通された。二人分のベッドが空いていたが、それ以外は至って普通の子供部屋だった。

相部屋の患者はきつと老人か老婆だろう、と最初は思ったが、よく考えてみればここは：子供部屋なんだよな。と言うことは子供しか居ないんだよな。と言うか俺も子供扱いされてるんだよな。

僕、十七歳なのに。

ローザと言う名の看護師さんは言った。「隣の子はまだ十五歳の女の子なの。生まれつき心臓を病んでいてね。だから友達になってあげて」

驚いた。世の中には生まれてから一度も病院の外へ出たことがない人もいるのだ。

僕はきつとすぐに退院するだろう。でもその人はもしかしたら、一生病院から出られないかもしれない。そう思うと、その子がとても可哀相に思えた。

しばらくして彼女は病室へやって来た。どうやら検査を終えた後らしい。

幼い顔立ちだが、凜とした碧眼と金色に輝く髪はどことなく大人っぽい。彼女は本当に、僕より二つも年下なのだろうか。

「今日から同室のリーシャ君よ。仲良くしてね」とローザさん。

「：はあい」と、彼女の気のない声。

大人げなのは声も同じ。だがそんな態度ではいくら面倒見の良い僕でも、あまり良い気がしない。

しかしローザさんは「じゃあ私は仕事に戻るけど、何かあったらすぐに呼んでね」と言って、すぐ出て行ってしまった。

沈黙。

看護師さん、できれば今すぐこの気まずい空気を何とかして！と呼び止めたかったが、そこまで僕は我が儘ではない。

「ねえ」彼女が話し掛けて来た。「何？」「さっきローザに見とれてたでしょ」：いきなり何を言い出すんだ。

「別に：そんなつもりは無いけど？」「そう？でも隠す必要は無いわ。彼女はこの病院内で一番の美人だから。私も彼女にだけは心を許せるんだ：本当に、綺麗だよね」

そうなのか。しかし彼女がいくら綺麗でも、僕が本当に見とれているのはローザじゃなくて君の方なのだが：とはさすがに言えまい。彼女の性格からして”機嫌をとろうたって駄目よ！”とか言われそうだし。

「君の名前は何て言うの？」答えなど返って来ないだろうと思いながらも、一応尋ねてみた。

「：エレーナ」

おお、返事をした。こんな些細なことでも、感動してしまう僕。一体、どうしたのだろう。病気で頭がイカれたのかな。：確かに今は、脳腫瘍で入院中なのだが。

彼女はあまり素直そうな態度をとらない。だから彼女の冷たい感情が、僕に直にぶつかる。

「そう。エレーナちゃんか、覚えたよ。僕は：」「リーシャでしょ。さっき聞いたから」と愛想のない言葉で遮った。その態度にむっとしながらも、僕は言葉を続ける。

「そうだよ。：もしかして君は、人見知りなのかい？」多少嫌みがかもった言い方に、僕は後悔した。と言っても、僕にそんな気はなかったのだが。

「：どうして？」「あまり人と関わろうとしないからさ。例えば、

他の看護師さんとか」

「別に。私のことを病人扱いして距離を置く大人が嫌いだけよ。でもローザはそんなことをしない。だからよく話せるの」「そっか……」何だか、納得出来るような出来ないような。

「でも僕はまだ子供だ。だから僕には普通に接してくれるだろう?」「どうかしら? 私は別に貴方と仲良くしたいとは思わないわ」カチン、と来たが、引き下がる訳にもいかない。……あれ? どうして僕は、こんなにも必死なのだろう。

「でも僕は、君と仲良くしたい」「どうして?」「同室の子と話さないなんて、つまらないからさ」「……変な理屈」一蹴された。でも負けない。「でも僕は、いつもそうしてきた。だから君とも仲良くしたいんだよ。それに、友達になることに理由なんて要らないだろう?」

彼女はしばらく考えてから言った。「……分かった。じゃあよろしくね」

その日を境に、僕達はいつも一緒にいた。互いに今までの生活の話をしたり、本を読んだり。

ある日僕が医療の本を出すとエレーナは言った。

「私ね、病気が治ったら科学者になりたいの。今まで沢山の人が死んでいくのを見てきた。でもお医者さんが治してあげられないのは、薬がないからなの。そんな可哀相な人を、私が作った薬で世界中からなくしたいんだ」

それはいくら何でも無理だろう。全ての人間が死ななかったら道理に合わない。地球はたちまち人間で溢れ返り、食糧飢餓など、他の問題も出てしまう。

そして何よりも、僕の考えは彼女のそれと相反していた。

誰かが生きているから、誰かが生まれる。

誰かが死ぬから、誰かが助かる。

僕はそう考えていた。全ての人間が助かるなど、ありえないと。

しかし僕は、彼女の夢を壊すようなことをしてはいけないと思った。

「きつと叶うよ。君なら出来るさ」「本当？」

彼女はキラキラとした目で僕を見つめた。僕は、彼女に、吸い込まれそうになる。

「ああ、信じてる。僕もエレーナの夢を手伝いたいな」「ありがとう。ねえ、リーシャの夢って何？」

「え…」

言葉に、詰まった。

僕の、夢？

必死に思い出そうとする。

ええっと、昔、作文で書いたのは…。

「僕？…僕は、翻訳家になりたいんだ。医学や文化の発達が大きな国の書物を、この国の子供達に読んで貰いたい。そして国の発展に役立てて欲しいんだ」うん、確かこんな感じだった気がするな。多分。

この言葉なら、気休め程度にはなる。エレーナが生きながらえることが出来るかもしれないという、希望的空論を夢見ることには。

「そっか…じゃあ私の研究資料を世界中に発表する時も、リーシャに翻訳を頼むね！」「…良いよ」

僕は叶うはずのない約束をした。僕はともかく、彼女の心臓は決して治らない病気なのだ。

：神様は不公平だ。全ての人間に、同じチャンスを与えてはくれないのだから…

冬休みを目前にして

季節は巡り巡って行き、僕が入院して早四ヶ月半。もう十二月の寒さが部屋の外には広がっている。

しかし病室の僕達にはあまり関係ない。風邪をこじらせて体に負担をかけないように、いつも部屋には暖房がかかっていたからだ。

こんな病院生活が長く続き、時間が過ぎて行く中、僕はエレーナに惹かれていった。考えるのはいつもエレーナのことばかり。

彼女の笑顔はいつだって、僕の渴いた心を潤してくれる。僕は心から彼女を愛するようになった。

彼女の、とても叶いそうにない夢でさえも全て。

だが、もしかしたらそれは、家族や今まで仲の良かった友人が急によそよそしくなったことに対する淋しさから来たものなのかもしれない。だからこそ、この想いを彼女に伝えるべきかどうかで悩んでいた。僕はその想いが愛情なのかどうか、確かめる術を持たなかったから。

「どうしたの？」ある日、よろけた僕に心配そうにエレーナが声をかけた。「具合、悪い？」

その頃にはもう、彼女は僕と普通に接するようになっていた。多分、僕のことを信じてくれているのだろう。もしくは、本当に僕を子供扱いしているのだろうか？

「だ、大丈夫。大したこと、ないよ」僕は途切れ途切れに言った。最近の僕はどうもおかしい。頭がぐらぐらする。…うん、きつと、彼女のせいで。

もう、駄目だ：我慢出来ない。

僕は、エレーナを愛しておきながら：彼女と今まで通り、普通の友人みたいに接するなんて、出来ないよ。

「：エレーナ」

僕は想いを告げる覚悟を決めた。もし此処で今振られても、悔いはない。僕はどうせ退院出来る。そうすればすぐには無理でも、彼女のことを忘れられるだろうから。

：しかし、何と言えば良いのだろうか？

「：君のこと、好きになったみたいなんだ。勝手に片想いしても良いかな？」

やっと声となって出てきた言葉。しかしこれでは、はっきりと自分を伝え切れてないのではないか？

違う、僕の想いはこんな、曖昧な物なんかじゃない。なのに：まだ、伝え切れていない。一体、どうすれば良い？

気付いたら、抱き締めていた。

：勿論、離したくはなかった。

言葉に出来ないから、

言葉に出来ないなら、

こうするしかないんだ。

僕の言葉で驚きに見開かれた青い瞳。そして彼女は「駄目」と言った。

やっぱりな。だって僕達は仲の良い兄妹みたいで、恋人同士になどなれないのだから。

「駄目。だって：片想いじゃないもん。リーシャ、私も貴方が好き

よ」

突然の彼女の告白に、僕は夢を見ているのかと思った。そして本当に夢——、ではなかった。僕の想いが通じただけでなく、彼女も同じように僕のことを想ってくれていたのだ。

今こうして突き付けられた現実を、素直に飲み込めない。そんな僕を見て彼女は笑った。

だが奇跡って言葉を使おうとして、止めた。

もしもこれを奇跡と呼んでしまったら、彼女が助かるという奇跡が無くなってしまふかもしれないから。

ただ、そんな気がしただけ。

その年のクリスマス・イヴにエレーナが僕に話してくれた。「私の心臓、手術で治るんだって」

「本当？」驚いた。彼女はもう、治ることはないと思っていたからだ。病院を出ることも…。

「うん、今ドナーが現れるのを待ってるんだ」「良かった…」僕は安心した。しかし僕とは正反対に浮かない顔のエレーナ。

「でも、ドナーってことは誰かが死んじゃうんでしょ？」「そうだよ。でも必ず、全ての人間が助かるなんてありえないことなんだ。そんなの、理想郷じゃないよ」

「そう…」落ち込む彼女に僕は必死でフォローした。「だから君がこれから頑張って、沢山の人を助ければ良いだろう？」「そうね…でも私、そこまでして生きたくないよ。誰かが死ぬのなら、私が代わりに死んであげたい」

冷たさを感じる声。どうして僕よりも幼いはずの彼女が、こんなにも大きな闇を抱えているのだ？

「駄目だ！君は何があっても生きなきゃいけない。君は病院の外の世界を知らないんだから。それなら僕が、君の代わりに死んであげる。僕は君無しでは生きていけないんだよ……」

そう言っ僕は彼女を抱き締めた。彼女を、エレーナを失いたくなかった。絶対にこの腕を離さないと、絶対に彼女を守るんだ、と神に誓うリーシャだった。

それから2人は仲睦まじい恋人同士となった。周りが羨ましがる程、2人は幸せな日々を送った。

暖かい人々の心。それに触れて、僕は家族から切り離された哀しみを癒していった。それはきつとエレーナも同じだろう。

僕等は永遠に、傍に居たいと願っていた。叶わないと分かっているも、叶えたかった。

そして彼等が付き合い出して一年後、二人は結婚した。囁かでも、美しい結婚式を挙げて。

皆は、こんな時間が当たり前のように永遠にあるものだと感じていた。しかし――、

別れは突然に

僕は今まで、生きていることは当たり前のように思っていた。だが彼女と出会ってから、それが間違っていることに気付いた。

彼女が教えてくれたんだ。明日が来ることの素晴らしさを。命が続くことの重さや大きさを。

今の僕はそれを幸せだと思って生きている。それを教えてくれた彼女になら、僕は何だってやってやる…。

今の僕の意味は予想以上に現実や常識を離れていく。彼女のためなら命を差し出したって良い――。

僕が入院して一年半が過ぎた頃。そう、新婚生活とも言うべき病院生活にも馴染んだ頃。

悲劇は突然にやって来た…訳ではない。きっと音もたてずにあいつらは、僕の頭を、あるいは心を食い尽くしてきたのだろう。僕がそれに気付かなかっただけで。

ある日僕は主治医に呼ばれて診察室へ行った。

ああ、きつともうすぐ治るから退院の準備をしろだの何だのって話をされるんだろうな。エレーナは淋しいなんて言うのかな。

最期まで、傍に居てあげたいな――彼女が息を引き取る時まで。

でも、もしも…いつか彼女にドナーが現れて、手術をしたら二人で幸せに暮らそうか…安易な考えしか浮かばない僕に冷たく突き刺さった一言。

「君はもう助からないのだよ」

え…？僕は耳を疑った。

僕が、死ぬ？

「ちょっと待って下さい！どうしてですか！？」

僕は治るんじゃないんですか！？」

納得がいかなかった。冗談じゃない。

僕の病気は、大したことない…はず、なのに。

「君の腫瘍はかなり厄介な位置で、手術で取り出すのは無理なのだ。きつと腕利きの良い医師なら手術も可能かもしれないが、危険も伴うのだ。助かる確率は…わずか十％だ」

「そんな…」急に目の前が真っ暗になった。僕は一体、どうしたら良いのだろうか？

「そこで、君に相談があるのだが」「…何でしょう」僕はもう、何もかもが嫌になった。だから何を言われても構わないと思った。

「君は、エレーナちゃんを助けたとは思わないかね？」

「…はい？」僕は医師が何を言いたいのか分からなかった。「どう言うことでしょう？」

「君は彼女にドナーが現れれば、彼女の手術が可能なのを知ってるだろう？」

だから君が死んだ後、君の心臓を彼女に移植できるんだ」

そうなのか…僕が死ねばエレーナは助かる。エレーナに未来を築く

チャンスが与えられる…。

「まあ考えてみておくれ。まだ君の命に、希望が無い訳ではないのだから」

「分かりました」そう口では言っていたものの、僕の心はただ一つに決まっていた。僕は医師にこう言った。

殺してくれ、と。

彼女を、救ってくれ、と。

「僕を殺して下さい。エレーナが助かるのなら」

「また、随分とご決断の早いことだが…ちゃんと考えて、言っているのかね？」「はい」「君の命に関わる、重要な案件だぞ」医師は何度も聞いた。

まるで、僕の意志を確かめるように。

「それを承知の上で、僕は身を投げるつもりです。——しかし条件があります」

「条件、とは？」「まず眼球をベンに、胃をディアナに、腸をビリーに、両腕をメアリーに、両足をカナリアに、そして」

皆、この病院の患者である子供の名前だった。

そして。

「…そして心臓を、エレーナにあげて下さい」

「…後悔はしないかね？」医者が問う。

「はい。僕にはもう、何もありません。家族や友人は皆、僕の病氣から逃げた。僕と一緒に現実と戦ってはくれなかった」

僕は、ぽつりぽつりと話し始めた。

「でも彼女達はいつも、僕の傍に居てくれたんです。皆に恩返しをしたい、出来ることなら。でも僕には何も出来ない。だからせめて、彼女達に明るい希望を、夢を与えてあげたいんです。この病院の患者さんに、笑顔を。」

後：僕の臓器の中で使えそうなパーツは全て、他の病院の患者さんにも提供して下さい。僕一人の犠牲で、エレーナが、皆が幸せになれるのなら」

そうだ、自分が言ったんじゃないか。

希望は絶望の裏側にあるのだと。

エレーナを助ける代わりに、自分の命を差し出すと。

しばらく考えてから、医師は言った。「分かった。では皆の手術が終わるまで延命器具を使おう。」

死ぬのは、それを全て見届けてからの方が良いだろう？」「ありがとうございます、本当に……」

やった……これで、エレーナは助かるんだ。

ずっと、夢見てたこと。

それは、僕の生命いのちと引き換えにして。

僕が、彼女を助けるんだ。

その意志が変わらない内に、僕は部屋に戻った。彼女にあるものを残すために……。

二人の知らない話（前書き）

リーシャが病室に戻った後の、医師とローザの会話です。
エレーナは勿論、リーシャもこの事実知りません。

二人の知らない話

「先生、いくら何でも酷過ぎませんか？」ローザは言った。

「：何がかね？」「彼が助かる確率が低いなんて、嘘です」医師が聞き返す言葉に、ローザははつきりと言った。

「確かに腫瘍の位置は悪いかもしれませんが——しかし、腫瘍そのものは小さいのですよ？」

「分かっている。しかし確実に、上手く行く保障は出来ない」

「彼はまだ若いんです。術後の回復力も大いに期待出来ます。仮に手術の成功率が低かったとしても、：私達に彼の命を奪う権利はありません」これは一般論とも思えるが、むしろローザの個人的な意見にも聞こえた。

「確かに、そうかもしれんが：」医師はコーヒーを飲んでから言葉を続けた。「しかし彼女を始めとする多くの子供達に臓器を与えてあげれば、より多くの命が助かるとは思わなかね？大を救うには小を切り捨てるしかないのだ」「そんなの、おかしいです」ローザは反発した。「彼が居なくなったら、悲しむ人がいるじゃないですかっ」

「リーシャ君とエレナちゃんには悪いが、これは仕方のないことなのだよ。それに、この病院から多くの子供達の笑顔を失いたくない：」

医師の言葉に何も言い返せず、ただ黙っていることしかできないローザだった。

葛藤と、生命（いのち）の選択

決意をして、部屋に戻った。つもりだった。

しかし。

彼女の、その笑顔を見ていると。

やはり、気持ちが揺らいでしまう。

「リーシャ、今日は何して過ごす？」

明るい問いに、上手く答えられない。

平凡で、それでも幸せな日常に、僕の”生きたい”という欲望は引き戻されてしまいそうだ。

「うん：そうだね。新聞でも読んで、ごろごろしていようか」「まあ！」彼女は驚きの声を上げた。「なんて不健康で贅沢な時間の使い方かしら」

「仕方ないじゃないか。結局、僕は病人なんだから」

言いながら、気付いた。

そうだ、僕は病人。

治らなければ、一生、病室（こし）で暮らすことになる。

それは楽しいことかもしれない。

：けど、それは”死”と同じではないか？

医師の提示した”死”を、受け入れるべきか否か。

——少年の心の葛藤は、その夜、一晚続いた。

”僕が生きるか死ぬか”では、気持ちが揺らぎそうだった。だから、問いを掘り替えることにする。

”生き永らえるべきは、僕か、彼女か”

うん。これなら迷わずに、僕は死を受け入れることが出来る。ついでに、他の臓器で彼女以外の病人も助かるというオプション付きだ。でも、本当にこれで良いのだろうか。

悩む。この判断が正しいのかどうかは、正直誰も、分からない。

けど、確かに一つ分かるのは。

僕は彼女を失えば、
生きる希望を無くすだろう。

彼女が僕を失っても、
叶えるための”夢”は残る。

：別に、取り残された後の孤独を味わいたくない、とか、逃げの姿勢を取る訳ではないが。

「僕の”夢”か…」

月明かりだけが差し込む深夜の暗い病室で、一人呟く。

静寂の中には、微かにエレーナの寝息が混じっていた。

”夢”、と言われれば。

決して叶うことのない”夢”が、一つだけある。

それは。

彼女と、エレーナと共に生きること。

そりゃあ、ねえ。

共に生きていたい。一緒に人生を歩んで行きたい。

…心から、そう思う。

しかし彼女の笑顔をこの世に遺すためなら、仕方ないとも思えるのだ。

例え代償が、あまりにも大き過ぎる物だとしても。

「やっぱり…僕が死のう」

僕以外、誰も起きていない病室で、今のところ僕しか知らない未来が決まる。

「エレーナ。君は、僕の分まで——幸せに生きて」

歯車は全て嵌まった。

後は、時間が回してくれる。

誰も止めてはくれない。

いや、止められない。

止まってくれない歯車の運命に乘せられて、僕は死ぬんだ。

それなら…恐怖を感じずに。

きちんと覚悟を決める時間だけを得て、僕は死ぬことが出来るだろう。

生命（いのち）の果てに

医師から相談を受けた次の日、僕は改めて承諾した。

もう後戻りは出来ない。

そう自分に言い聞かせ、覚悟を決めさせるためなのか。

無意識の内に、恐れをなしているのだろうか。

…でも、良い。

彼女が笑顔で、生きていてくれるなら。

「ねえねえ、リーシャ！」その夜、エレーナが検査室から戻ってくるなり大声で叫んだ。

「私、手術受けられるんだよ！」彼女の嬉しそうな声。

分かったたよ、エレーナ。だってドナーは僕なのだから。

——なんて、そんな言葉を言えるはずがない。

彼女を傷付け、泣き喚かせ、挙げ句の果てに”手術を受けない”等と言ひ兼ねないからだ。

だから僕は、精一杯驚いて見せた。「それは本当かい？僕の頬を叩いてみてくれない？」

「それより、もっと良いこととしてあげる」そう言って彼女は僕の頬にキスした。

僕は、目をしばたたかせた。

「…これでもまだ、信じられない？」はにかんで、彼女は言った。

僕は言う。「いや、信じたよ」

ああ、やっと信じられたさ。この世界の終わりって奴を。

君の唇の温度とは真逆の、重たく冷たくのしかかる…どうしても逃
れられない現実って奴を。

「良かった、君はやっと退院できるね」それが、君の”夢”。君と
僕の、”夢”だから。

「うん！嬉しい。…でも、リーシャも早く体治してね」彼女は笑う。
笑って言う。

その問いに、その笑顔に何と答えれば良いのか分からなかった。
しかし返事をしないとこえって怪しまれる。

迷った挙げ句に、僕は。

「…ああ」としか答えられなかった。

僕の生きた、最期の日

僕はあの日、そう——運命が変わったあの日。

死を覚悟し、躊躇して。

決意した、あの日。

出来なかったこと。

彼女への”とある贈り物”を、彼女の居ない隙に隠すこと。

あの日は意志が揺らいだこともあり、出来なかった。

だが、今はもう——揺らがない。

だから僕は、あの日出来なかった贈り物を病室に残した。

そして手術の日々が過ぎ、僕は臓器を取られていった。

エレーナに不審に思われないようにするのは凄く苦労したが、何とか時は過ぎていった。

そして最後の手術。

エレーナへの心臓移植だった。

バチスタ手術は無事に終わり、退院可能な子供が増えた。

皆笑顔で。

僕は卑怯者だ。

エレーナは僕を失うと言うのに、僕は先に死んでしまうのだから。

そう、僕は全てを失う訳ではないのに。
彼女と僕の”夢”は、叶うと言うのに。

僕の生命を引き替え^{いのち}にして。

エレーナが退院する前日、僕はこの世との繋がりを完全に絶った。

「本当に、もう悔いはないのかね？」医師は問う。

「ええ、もう十分です。今までありがとうございました」

その言葉が、医師への返事が僕の最後に残した言葉だった。

バツン、と何かが切れる音がした。

心電図の一定なピーツと言う音をBGMに、僕の意識は無くなっていく。

ふとエレーナの顔が浮かんだ。

楽しそうに笑う顔。

哀しげな顔。

怒った顔。

幸せそうな顔。

照れてはにかむ顔。

：沢山の、出会ってから今までのエレーナの顔。

ねえ、エレーナ。

君は今、どんな顔をしているだろう？

死者からの手紙

リーシャが死んで、悲しんでくれるのは病院にいた人々だけだった。前からよそよそしい様子を見せていた家族は、どうやら知っていたのだろう。

リーシャが、助からないことを。

だから、冷めた目で：いや、知っていたからこそ、”彼が死ぬ”ことに關して心の準備が出来ていたのだろう。

一方、医師から何も聞かされていないエレーナは、涙を浮かべるローザの胸の中で泣いた。まるで全てを失ったかのように――。

退院したエレーナはリーシャの病室の荷物を片付けていた。結局、彼の遺族は病院に訪れなかったからだ。

通夜は葬式は開いてくれたものの、遺品すら取りに来ないとは。

思ったが、仕方ない。

それに、私も彼の妻。最期まで傍に、同じ病室にいたんだし。

と言う訳で、嫌がることなく片付けを引き受けた。

と、その時――、

「あら？」分厚い封筒を見つけた。そこには”愛するエレーナへとあった。

彼女は慌てて封を切った。

中には銀色のペンダントと手紙が入っていた。ペンダントは私達がお揃いで買ったものだ。彼女の胸の上では、哀しげにピンク色のペンダントが揺れる。

同じ愛の形でも、隣にいることすら出来ない――。

ペンダントは一旦封筒に戻し、彼女は手紙を読んでみることにした。

”エレナ、君がこの手紙を読む頃には僕はもう、生きてはいないのだろう。

この世に生きることはとても楽しく、そして辛いことだった。しかし君に出会えていなければ、僕は自分の存在価値を見出だせなかっただろう。

僕は沢山のことを君から教えて貰った。だから今度は僕が君に未来へのチャンスを与えよう。

僕のためを思うならどうか、その命を自分の納得いく使い方をして欲しいんだ。

大丈夫、君ならきっと出来る。君の夢を叶えるために頑張っておくれ。

そしてこのペンダントは僕達の象徴だ。いつまでも二人が一緒にいられるように――。”

彼女は泣きながら、手紙を読み返した。何度も何度も。

そして彼女は思った。このどうしようもない気持ちを、一体何にぶつければ良いの？

この後の行動一つで彼女の運命は変わる。

それは神の悪戯に導かれて……。

死者からの手紙（後書き）

この後、二パターンの終わり方があります。

・・・いえ、ありました。

友人の何の気無しに呟いた、ふざけた発言を具現化してみようかな、と。

そうすると、終わりは三パターンとなりますね。

ただ・・・その三パターン目はちよつと・・・あまりにも今までの設定と、登場人物のキャラが食い違い過ぎていて・・・。

だから”もし、この人達が悪者だったら、こんな終わり方も有り得るよね？”って、仮定の上で読んで下さい。

先に言っておきます。

・・・実際は、こんなキャラじゃなかった。

ではでは、ラスト三つをお楽しみ下さい。

e n d . 1 愛（前書き）

P Vが200を超えました．．

感謝、感謝です！！

それでは、まずは一パターン目をお楽しみ下さい。

end. 1 愛

彼女はベッドに突っ伏して泣いていた。

愛する彼が病気で死んだ。

ああ、もう二度と聞くことの無い彼の声。

彼はせめて手紙という形で、何かを伝えようとしているのだろう。

だがそれは完全に読み解くことは出来なかった。

リーシャは自分に手紙を残してくれたのに、何故彼が死んだのかまでは分からなかった。

頭の中に叩き込まれた”病死”と言う情報を、彼女は疑う余地もない。

その時ローザがエレーナを訪れた。「エレーナちゃん」

「何？」「エレーナちゃんに伝えなきゃいけないことがあるの」

彼女は話し始めた。リーシャが彼女に残した言葉を。

”ペンダントはお守りのつもりだった。

君がもし一人で淋しいのならそれを見て、君には僕がついていることを感じて欲しかった。

でもそれは間違っていたのかもしれない。

…もし君がいつか、誰かを愛する日が来たらその時は僕を忘れて欲しい”って。それと”手紙の内容は気にしないで”とも言っていたわ。

その手紙を捨てる前に、それが出来なくなったからそう言い残したみたいね」

「そう：分かった」でも彼女は、リーシャの他に誰も愛せないと思
った。

それから彼女は努力を重ね、科学者としての夢を叶える。
彼女が発表した論文のお陰で、沢山の人々の命が助かった。

しかし彼女は本当の幸せを掴めなかった。
その中に不幸という痛みと苦しみを抱えていた。

「せめて、子供がいたら良かったんだけどね：」
何故か、出来なかった。

これもまた、神の啓示か。
リーシャが自らの生命を絶ったことに対する戒めだとは、彼女は氣
付いていない。

そして最後に彼女は、一人寂しい人生を終えた。
生命の重さと強さを知り、その渦に飲み込まれて。

end. 1 愛（後書き）

あの．．．十分暗い終わり方にも見えますが。

これでも、まだマシな方なんです．．．．．すいません。

e n d . 2 哀（前書き）

残忍な方の終わり方です。

end. 2 哀

彼女はベッドに突っ伏して泣いていた。

愛する彼が死んだ。

もう二度と聞くことの無い彼の声。

このふがいなさは、手紙を読んでも消えなかった。

彼女にはそれを、その手紙の意味を一回で完全に読み解くことは出来なかったので、何度も読み返した。

しかし何故、彼は死んだのだろう。

頭の中にその謎だけが残った。

あんなに、幸せだったのに。

その時彼女は、手紙に続きがあることに気付いた。

一枚だけだと思っていた手紙。

二枚目には、こう続いていた。

”もし君が本当に知りたいのなら、僕は真実を伝えよう。

僕の病気は治る確率が低かった。僕が病気で脳死する頃には、僕の心臓は移植には使えないかもしれない。

君を救うことが出来ない。だから病気が体を蝕む前に僕は、全ての臓器を移植することに決めたんだ。

勝手に悪いと思っている。でも許して欲しい。

そして、それを勧めた医師を責めないでくれ。彼もきっと僕一人よりも、幼い沢山の子供の命を優先したかったのだから”

彼女は悔しかった。

そんな理由であの医師は、助かるかもしれないリーシャを殺したのだ。

許せない。

あの医師もリーシャから臓器を奪った子供達も皆、許せない。

殺してやる、一人残らず殺してやる！

不意に、一枚目の手紙の一節が脳裏に過ぎる。

” 今度は僕が君に未来へのチャンスを与えよう。僕のためを思うならどうか、その命を自分の納得いく使い方をして欲しいんだ。

大丈夫、君ならきつと出来る。君の夢を叶えるために頑張っておくれ”

私の納得がいくことは、貴方を殺した人間共を一人残らず殺すこと。絶対にあいつらを後悔させてやる！

先ずは隣の部屋のベンとビリーから。

：どうせ患者なんて、点滴を抜くか毒を混ぜればすぐに死ぬんだから。

にやりとどす黒い笑顔を見せるエレーナ。

消灯時間を待ち、誰にも見つからないようにそっと病室を抜け出す。

入れ違いにローザがエレーナを訪れた。「エレーナちゃん？」

しかし、彼女はいない。

「…あら、何処へ行ったのかしら。リーシャ君からの伝言があったのに…」

ベンとビリーの心電図が止まると同時に、緊急のナースコールが鳴った。

ローザがエレーナの病室を飛び出して隣室に向かう。

二人はもう、手遅れの状態でそこにいた。

しかしそこにはもう、彼女の姿はなかった：

ディアナ、メアリー、カナリアのいる別館には例の医師もいた。

その医師は変態で、普段から女子部屋にいてもおかしくはないのだが…今日は違う。

彼女が呼び出したのだ。

そう、エレーナが。

部屋には予めガソリンが撒いてあり、三人の点滴には大量の睡眠薬が混入され意識は朦朧としていた。医師が部屋に入ると同時にエレーナは入口に火を放った。

彼は驚いて振り返ったが、彼女を見て——妙に納得したような顔をした。

「そうか…君になら、私は殺されても仕方ないのかもしれん」

そして、こう尋ねた。

「私はどうなろうと構わない。しかし友達だった彼女達も、一緒に焼き殺す気かね？」

「ええ、そのつもりよ」

声の主はエレーナ。

そう、火を放ったのはエレーナだった。

「皆、地獄に堕ちなさい。この業火に焼かれて」返事をする彼女。

「リーシャ君は君と一緒に生きたがっていた。

その願いが聴き入れられないと分かっている、な。君の病気は余りにも酷過ぎて、今すぐ手術をしなければ…治る見込みがなかったのだ。

彼の想いが叶えられなくて済まないと思ってる。

だからせめて、君と永遠に一つでいられるようにしたんだ。私にはそれしか出来なかった…彼の生命を奪うことでしか、君の生命は助けられなかったのだから」

そこで部屋は崩れ落ち、何も聞こえなくなった。

ただ燃え盛る炎だけが、彼女を虚しく照らしていた。

「そんなの…ただの言い訳よ。エゴでしかない」

その呟きは火の唸り声に掻き消された。

その時、彼女は気付いてしまった。

彼の心臓は、今私の中にある。

ということ、私も彼を殺した一人だと。

復讐などしても彼は帰って来ないのだと。

私は彼の望む生き方をしていないのだと、今更になって気付いた。

崩れ落ちる病室の前で、焦げ臭い友人達と医師の死体の前で、彼女は泣き喚いた。

自分自身が、リーシャを犠牲に生きている。

その事実が、あまりにも申し訳なき過ぎて。

それから彼女は、しばらく少年院で過ごす。

後に外の世界を知る時が来ても、彼女は本当の幸せを掴めなかった。
心の中に不幸という痛みと苦しみを抱えていた。

だから最後に彼女は、自ら命を絶つ。

生命の重さいのちと強さに圧倒され、押し潰されて。

end. 2 哀（後書き）

さりげなく書いてありますが・・・。

”その医師は変態で、普段から女子部屋にいてもおかしくはないのだが…”

どんな医師だよ。

とツツコミを入りたい。

一体、女子部屋で何をしていたんでしょう？

ある意味、彼のしたかったことも分かる気はします。

野郎リーシャの生命いのちよりも、幼女エレナの生命いのちや女の子達の生命いのちを優先すること。

いやあ、彼のやりたいことにはいつもブレがありませんね。

さて、いよいよ次は問題作です！！

え？これも問題作だって？

・・・気のせいでしょう（笑）

end. 0 逢（前書き）

とうとう、此処まで来ました。

最後まで、気合い入ってます！

・・・え？どの位かって？

うーん・・・文量が普段の二倍以上ある点？

まあ、お楽しみ下さいな♪

end. 0 逢

彼女はベッドに突っ伏して泣いていた。

愛する彼が病気で死んだ。

しかしもう二度と聞くことの無い言葉を、手紙という形で聞くことが出来た。それは凄く嬉しかった。

その時ローザがエレーナを訪れた。「エレーナちゃん」

「何？」「エレーナちゃんに伝えなきゃいけないことがあるの」

彼女は話し始めた。リーシャが彼女に残した言葉を。

”君を一人にさせて済まない。

これから先、きっと君には沢山の試練や困難が待ち受けているだろう。

でも君は一人じゃないってことを、どうか思い出して欲しい”

——って。その言葉を言う前に、それが出来なくなったみたいね」

「そう：ありがとう」エレーナは礼を言う。

気丈に振る舞い、出来るだけ早く立ち直ろうとして。

そして彼女は、リーシャの分まで幸せに生きようと思った。

それから彼女は努力を重ね、科学者としての夢を叶える。
彼女が開発した新薬のお陰で、沢山の人々の命が助かった。

しかし彼女は本当の幸せを掴めなかった。

それでもなお最後まで彼女は、一人で懸命に生きた。

そして人生を静かに閉じる。

リーシャの優しさが詰まった二つのペンダントをつけて。

生命いのちの重さと強さを知り、それを皆に教えた後で。

そして、これはローザの死ぬ前日の話。

つまり、まだエレナが生きていた頃の話。

この日たまたま病室を訪れていたエレナは、昔話に花を咲かせた。

「でね、一つだけ、気になることがあるの」エレナは聞いた。

「どうしてローザは、リーシャの遺言を知っていたの？」

「死ぬ間際に頼まれたからよ」彼女は答えた。「彼から、直接言われたの」

「：そっか」少し安心したような、しかし淋しげな顔をしていた。

「どうかしたの？」「ううん。ただ、リーシャから直接：聞いたかったな、って」

「手紙を貰ったじゃない」「うん：けど、ローザは直接、声で聞いた」

そして思わず、こう呟いた。

「羨ましいなあ…」

エレーナが病室を出た後、彼女は一人取り残されたようにベッドに佇んでいた。

「羨ましい、か」ぽつり、呟く。

「羨ましいのは、私の方なのに」

病弱なエレーナを支えて来たのは、私だった。

孤独なリーシャを支えたのも、多分、少しは私のお陰だった。と、思う。

けど、二人が結ばれて、居心地が悪いのは事実。

最初の内は、妹のように可愛がっていたエレーナをリーシャに取られたと言う、淋しいけど嬉しくて、少し残念な、物悲しい物だと思っていた。

いつまでも、そう信じていたかった。

例え間違いに気付いていても、そう信じていたかった。

：リーシャを愛していたからだと悟ったのは、二人が結婚した時だった。

好き、とか。

そんなんじゃない。

愛してた。

何で、と言われても分からない。
けれど、私は彼を愛してた。

「ローザ。エレーナに言伝^{ことづて}、お願い出来ますか」

懐かしい彼の声。

もう、二度と聞くことのない。

目を伏せれば、いつも思い浮かぶ。

あの日の光景が。

誰もいない、深夜の手術室で。

大事な話があると言って、彼を連れ出した日のことを。

…貴方が居なくなったら、私、生きていけないかも。

「って…エレーナが言ってたんですか？」

…いいえ。でも、言いそうでしょ。

「ええ、確かに」

…これ、私の本心よ。

「ご冗談でしょう」

あえて、答えなかった。

何処か遠くの窓の外で、風が棧を叩いていた。

…本当に、死ぬつもりなのね。

「ええ。もう、決めたことですから」

…何だか、淋しくなるわ。

「そんな。ローザが淋しがったら、エレーナを支えて貰えませんかよ」

…大丈夫。彼女は強いわ。私なんかが居なくても。

彼女は、と小さく繰り返す。

「ローザ…貴女はまさか、死のうと思っと思っていますよね？」

…もう、うんざりなの。
この病院の方針には。

「本当に…それだけの、理由で？」

…何が言いたいのか？

「今度は、貴女の言葉を僕に下さい。正直な声が聞きたいんで」

…見抜かれてたのね。

「何と無く、ですが」

…十分よ。

「僕には二人の人間を、同時には愛せません」

…知ってるわ。

「もしエレナと出逢わなければ…」

…私を、愛してくれてた？

「さあ、どうでしょうか」

リーシャははぐらかした。

…意地悪ね。貴方って人は。

「ローザも負けず劣らず、ですよ。お互い様です」

…大好き。

「…知ってます」

…ねえ、わがまま言って良い？

「”死なないで” 以外なら、何でも」

…、死なないで。

「言うと思った。だから、先手を打ったのに」

…でも、死なないで。

言葉と共に、目からは涙が溢れてくる。

「駄目です。もう、決めたことですから」

リーシャは小さく笑った。

…そんなに、エレーナが好き？

「ええ、とっても」

…愛してた？

「世界で一番、愛してる」

…私が今、彼女を殺したら——私と生きてくれる？

「そんなこと、させません」

エレナを生かすことが、彼女と僕の”夢”、なんだから。

本心は飲み込んで、彼は続けた。

「ローザに、そんな哀しいことはさせません」

…優しいのね。

「そうでしょうか」 貴女はただ、僕の本心を知らないだけだ。

…ねえ、聞いて。

「何でしょうか」

…死ぬ程、好き。

ローザは言った。

…一生分の愛を、貴方だけに費やしたわ。

彼女は、リーシャの目を真っ直ぐ見たまま言った。

——多分、本気なんだ。

リーシャは悟った。

「…ありがとうございます」

例え受け入れられなくても、”誰かに愛されていた”と言う事実は嬉しく思う。

死ぬ間に、”誰かに愛されていた”と言う、些細な事実だけを抱き締めて、逝きたいと思った。
身勝手かもしれないけど。

それに彼女は、ある意味、家族より大切な人だ。
辛い時、哀しい時…いつも、傍に居てくれた。

…ねえ。もしエレーナと出逢わなければ…私を、愛してくれてた？
「さあ、今となっては分かりませんが」この言葉で、気休めになるのなら。

「もしかしたら、愛していたかもしれないね」

…そうだったら、良かったのにね。

「…そうですか？」僕はエレーナと結ばれて、良かったと思うが。

…だって、こんなにも、

「…”大好き”？」

…当たり前。いけないことだって、分かってもね。

「じゃあ、もう一つ…いけないこと、しましょうか」

…え？

彼女は腕を引っ張られ、本来は手術に使うはずの台に乗せられた。

…何？私を殺すの？

「違いますよ。…僕を、生かすんです」

…私の脳を、移植する気？

「面白いこと、言いますね」彼は笑い、そして真顔になった。

「違ふんです。僕じゃなくて——僕の子供を、生かすんです」

…どう言うこと？

「あー…こう言うこと、直接言うのは気が引けるんですけど…つまり、ですね…」

リーシャは濁した言葉を、クリアに言い換えた。

「率直に言います。——僕の子供を、産んで下さい」

…え？

ローザは頭がフリーズした。

…ちよっ、ちよっと待って！

「急な話で、申し訳ありませんが」

…そうじゃなくて！エレーナは？

「本人も知らないことなので、黙っていて下さいね」

彼は念を押す。

「彼女、心臓だけじゃなく——子宮も悪いんです。先天的に。だから、」

…仮腹ってこと？

「…だと良いんですが。生憎、彼女の身体は彼女自身の卵子すら作れません」

…そんな…知らなかったわ。

「僕だって。これは医師しか知らなかったらしいですよ。三日前まで」

…あの医師…！！

「怒らないで下さい。僕だって、怒りたいのを我慢しているんです」

…でも…！！

「だから、黙っていることを条件に。僕の子供を産んで下さい」

…こんな、ことって…。

理不尽だ。

彼の愛したエレーナは子供を産めず、

彼の愛さない私が、彼の子供を産むなんて。

あまりにも、理不尽過ぎる。

「無茶だと分かっています。悩んだ挙げ句、見知らぬ誰かに卵子を提供して貰うことにしました」

苦しげな表情。

苦渋の決断だったろうに。

「でも、誰だか分からない人との子供を産む位なら…少なくとも、僕を愛してくれる貴女の方が良い」

…悪い子。

「分かって、ます。覚悟の上で」

…でも、共犯だから…私も悪い子ね。

彼女は笑った。

…良いわ。貴方の好きにして。

「良いんですか？」

…構わないわ。

「ありがとうございます」

と言うことで、交渉は成立。
しかし、公には出来ない。

「何か、不思議な因縁ですね」

…そうね。残酷だわ、運命って。

でも、嬉しい。

リーシャを取られたことで、エレーナに負けていた気がした。でも、彼の子を産めるのは私だけ。

今だけは…優越感に浸れる。

「あ、このことは…誰にも言わないで下さいね」

…分かってるわ。

二人だけの秘密。

その言葉は甘美で、彼女を絶頂させるには十分だった。

その、数ヶ月後。
彼は全ての手術を終え、医師にとっては”用済みのガラクタ”とな
ってしまった。

今は延命装置で動いている。

今日は、そのスイッチを切る日だ。

バツン、嫌な音がする。

私の嫌いな音だ。

生命いのちの、終わる音。

まだ生きている生命いのちを、
無理矢理絶たせる音。

「では、後は任せたよ。ローザ君」
医師はそう言って、出て行った。

部屋には、二人だけが残された。

「リーシャ君」ローザは言う。「無事、懐妊致しました」

「良かった…」まず、そう言ってから、「何故…敬語なんですか？」
彼は小さく笑って聞いた。

「だって、貴方様のお子さんだから」大事に、したくて。

「ありがと、ございます…」
息が切れて行く。

彼が弱々しくなるのが、見て取れる。

思わず、顔を寄せた。

そして、彼の生命いのちが止まる前に、私は。

時が、自身の心臓が、
止まるようなことをした。

一度も触れなかった唇。

最初で、最後に、

…重ねていた。

最初で、最後のキス。

…それが、やがて人工呼吸へと変わる。

ただ、生きてて欲しかった。

例え、私のことを見てくれなくても。

ただ、生きてて欲しかった。

そう思ったら、息を吹き込んでいた。

奇跡を信じながら。

しかし、

一瞬、正気を取り戻した彼は、

私の手を振り解ほどこうとした。

：勿論、瀕死の彼に、そんな力は残っていなかったが。

彼なりの償い？

彼女への申し訳なさ？

それとも：私への、拒絶？

本当のことは、分からない。

けど、私は、

力づくで彼を押さえ込み、

彼から顔を離さなかった。

私の頬を伝う、

大量の、大粒の涙。

シーツを濡らし、

彼の頬を流れ、

私は訳が分からなくなる程に泣いた。

信じたくなくて。

何もかも。

例えば、

後ろで流れる心停止音。

温もりを失っていく、彼の唇。

冷たくなっていく、私の心。

そして、

二度と叶うことのない想い。

許されなかった。今だけは。

彼はそのまま、

眠るようにして亡くなり、

この部屋には、

私一人だけが取り残された。

私は、誰にも悟られぬように、
そっと涙を流した。

今、思い出しても哀しい想い出。

でも、

「ふふ」

何故だろう、今は少し、気が楽だ。

「きっと…もうすぐ、貴方に逢えるから、かな」

分かってる。

貴方の返事など。

”彼女を待つ”のでしょうか？

分かっているけど、

その上で、

一つ問わせて欲しい。

”あの世（この世界）で、

貴方は私を

愛してくれますか？”

「ローザの意地悪。頑固者」

エレーナは病院のロビーにある自販機に、コインを入れていた。

ボタンを押し、しゃがんで缶コーヒーを手にする。

プシッ、と音を立てて缶を開けると、腰に手を当てて半分程、一気飲みをした。

「…苦っ」思わず、顔をしかめた。

よく見ると、ブラック。
普段は”微糖”なのに。

「何、やってるんだか…」

動揺、してるのかな。やっぱり。

ローザが、何も話さないことに。

「彼女：きつと真実を、墓場まで持って逝くつもりね」

薄暗い廊下で、彼女は一人呟いた。

独身であるはずのローザが、シングルマザーとなった。

相手は、不明。

誰にも明かされていなかったらしい。

一つの可能性が浮かんた時、私は全力で否定した。
いや、しなかった。

「まさか、ね」

だって、私ですら、
彼に抱かれたことはなかったのに。

そう、ローザに先を越されたと、

負けを認めたくなかった。

だが。

…嫌な予感は、的中した。

彼女が産んだとされる双子。

女の子の方は、勿論、ローザにそっくりだった。

そして…男の子の方は、

まさに”生き写し”と言う言葉が似合いそうな程、

——リーシャにそっくりだった。

「嘘よ…馬鹿」

彼が、そんな間違いを犯したとは考えられない。

いや、考えたくない。

だからお願いするんだ。

「もし、私がいつか…あの世（その世界）に逝ったら、沢山、沢山抱いてね？」

end. 0 逢（後書き）

今晩は・・・。

ゴールが見えました。
良かったです。

とはいえ、作品の完成がゴールではありません。

読んで下さった方々に何かを与え、何かを考えさせて、初めて・・・
本当に”ゴール”に到達したと言えるのです。

と、言う訳で。

何かを訴えたいと言う方は、感想でどうぞ。

最後まで読んで下さった方々、本当にありがとうございました！！
言葉にならない程の、感謝の気持ちで一杯です。

これからも、皆様を楽しませ、皆様の印象に残る作品を沢山書けるように頑張りたいと思います！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0585y/>

生命の果てに

2011年12月16日17時49分発行